

タイトル	アイヌ民族における政治社会の形成について ― アイヌ史の通史構築への試み ―
著者	坪田, 芳典; Tsubota, Yoshinori
引用	
発行日	2025-03-20

論題 「アイヌ民族における政治社会の形成について

―アイヌ史の通史構築への試み―

坪田芳典

〔本稿の目的〕

アイヌ史の構築という試みはこれまでも幾度か行なわれてきたが、未だその実現には至っていない。アイヌは無文字社会であり、自らの歴史などをユカラという叙事詩の形式で、口承により伝えられてきたという史料的制約が、その主な理由として挙げられる。

しかし、本稿では寛文九年（一六六九）に起きたシャクシャイン蜂起に焦点をあてることにより、アイヌ史の構築は可能なのではないかと考えた。なぜシャクシャイン蜂起を中心軸にしたかという点、シャクシャイン蜂起時のアイヌ社会には、血縁を基本とした伝統的共同体から、首長層を中心に血縁を越えた地縁や利害関係で構成された政治共同体への成長がみられるからである。加えて、この時期には、アイヌ民族としての意識が形成されたとは言いえないまでも、民族意識が芽生え始めた時期でもある。

また、このようなシャクシャイン蜂起の際に見られる伝統的共同体から政治共同体への発展は、それ以前のアイヌ社会には見られることがなかったのだろうか。さらに、シャクシャイン蜂起後のアイヌ社会では、政治共同体はどのように発展、または変容して行ったのだろうか。このことを明らかにするために、原始時代から日本史的近世までを射程としてそれぞれの章で検討していった。

なお、開拓史観からの脱却を目指した海保嶺夫の見解が、現在では通説的見解として用いられることが多い。しかし、この海保氏の見解は幕藩制国家論や英雄時代論を手掛かりとしたものであったため、この理論に該当しない事象や事柄はこれまで無視されてきたなど課題を残している。そこで、本稿ではアイヌ民族が政治社会を形成した経緯について、政治社会に関する理論を当てはめるのではなく、個別の文献に基づき、アイヌ史の歴史的事象を丁寧を追うことで、これまで先行研究では解明されなかった部分を解明していくことも目的の一つである。

〔目次〕

はじめに―アイヌ史の通史への試み

第一部 アイヌ社会における「政治社会の萌芽・形成期」

第一章 考古学からみたアイヌ社会

第二章 エミシ社会からみたアイヌ社会

補論1 樺太と千島列島のアイヌ社会

第三章 「夷和騒乱」からみたアイヌ社会

第二部 アイヌ社会における「政治社会の成熟期」

第四章 商場交易によるアイヌ社会の変容

第五章 シブチャリ騒動からみたアイヌ社会

第六章 シャクシャイン蜂起からみたアイヌ社会

第七章 シャクシャイン蜂起後のアイヌ社会

第三部 アイヌ社会における「政治社会の変容期」

補論2 商場交易から場所労働への転換

第八章 クナシリ・メナシ蜂起からみたアイヌ社会

第九章 エゾ地幕領期におけるアイヌ社会の変容

むすびにかえて―アイヌ社会における「政治社会の衰退期」

〔論文の内容の概説〕

第一部は、アイヌ社会における「政治社会の萌芽・形成期」と題しており、第一章と第二章を萌芽期、補論1と第三章を形成期と位置付けている。

第一章では、考古学の見地を参照に、旧石器時代から擦文時代までのエゾ島を中心に、気候変動への対応による社会構造の変化と、それに伴う交易体制の形成や他集団との衝突などによる軍事体制の形成を見ていくことにより、その後のアイヌ社会における社会構造の変化を考察する際の参考にした。

第二章では、ヤマト政権（律令国家）の北上に対するエミシ社会のなかに、軍事的に對抗する姿勢と、律令国家に組み込まれていく姿勢が複雑に併存している。このようなエミシ社会の社会構造それ自体が変化したことを見ていくことで、松前藩や江戸幕府と言った幕藩制国家と対峙した際のアイヌ社会がどのような生存戦略を選択していたのかを参考にした。また、律令国家に組み込まれたエミシ社会が俘囚社会として、東北地方北部を中心にある程度の自治を行っていた姿は、「味方アイヌ」として松前藩政の末端を担っていた姿を彷彿されるため、シャクシャイン蜂起後のアイヌ社会を理解する上での参考になり得た。

補論1では、十五世紀までの樺太アイヌと千島アイヌの動向を見ていくが、史料制約から断片的な動向に留まった。比較的詳細な動向が窺えた樺太アイヌは、モンゴル帝国との対峙により社会内部における統合化を進めていたと見られることから、政治社会の形成期を迎えていたと考えられる。

第三章では、十四世紀から十六世紀後半にかけてのエゾ島のアイヌ社会を見ていく。その中心は史料的制約から渡島半島南端であるが、長祿元年（一四五七）のコシヤマイン蜂起から天文二十年（一五五一）の天文の講和までの間に、蠣崎政権を主軸として結集し始めた和人勢力との衝突や、内部対立など混乱状態にあるアイヌ社会を垣間見られた。それゆえに、この紛争期におけるエゾ島のアイヌは、政治社会の形成期を迎えたと考えられる。

第二部は、寛文九年（一六六九）のシャクシャイン蜂起を中心に、商場設置によるアイヌ社会の変容がどのような形で蜂起に関わっているのか、また、どのように政治社会化は進行していったのかを検討した。

第四章では、商場交易の開始によりアイヌ社会がいかなる変化を迎えたのかを検討した。商場を設定されたコタンの首長は周辺コタンに対して影響力を強めていき、一部ではコタン連合体を形成するに至ったと推測される。このことは、弘前藩の史料に記録された西エゾ地と東エゾ地の状況から垣間見られたからである。

第五・六・七章では、シャクシャイン蜂起前後の状況から、地域によって政治社会化の進行度合いが異なるアイヌ社会において、それぞれのコタンがどのような動きを見せたのかを検討した。具体的には、首長層を中心に統合化を進めて松前藩に対抗する動きを見せる勢力や、松前藩に味方する勢力、中立を保つ勢力など多様な動きが確認された。これは松前藩への不満により結集したアイヌ社会が蜂起したとする従来の見解とは異なる状況であったと言える。

第三部は、シャクシャイン蜂起後、商場交易から場所経営へと転換していった松前藩の経済体制に対応していくアイヌ社会が、次第に交易者から場所労働者へとその姿を変えていく状況を中心に見ていく。その変容の結果、アイヌは場所請負の商人などに酷使されるようになり、松浦武四郎を始めとする多くの和人にその苛酷な状況が記録されたのは知られているが、この和人による非道な行為を通して、次第にアイヌ社会内部におけるエスニシティは強化されていった点については、これまで注目されてこなかった。この強化されたエスニシティは近代以降の同化政策のなかでも堅持されていくことになることから、この点にも着目しながら、本稿ではアイヌ社会における「政治社会の変容期」を検討している。

補論2では、シャクシャイン蜂起後のアイヌ社会を見ていく。蜂起後のアイヌ社会では商場が増設されたことにより、有力首長の政治的・経済的権限は衰退していった。また、幕藩制国家体制型の資本主義経済の影響を受けて商場交易から場所経営へと松前藩の経済体制は転換していった。アイヌ社会はこの変化に対応すべく社会構造を変化させていった。

第八章では、寛政元年（一七八九）のクナシリ・メナシ蜂起前後のアイヌ社会を見ていく。この時期は、蜂起直前のエゾ島および千島列島南部において、場所労働の波及により首長層を中心としたコタンが、場所を中心としたコタン連合体へと変容していく過渡期である。この場所労働が定着している地域と、定着していない地域との差がクナシリ・メナシ蜂起の際の首長層の動向に反映されていたと見られる。

第九章では、寛政十一年（二七九九）から文政四年（一八二二）までの第一次幕領期と、安政二年（一八五五）からの第二次幕領期のアイヌ社会を見ていた。この時期は、特に幕領期において同化政策の推進を強化するために、役アイヌを設置したことにより、従来の首長層を中心とする政治共同体が変容して行った。始めは首長層を役アイヌとしていたが、

次第に同化政策を推進するアイヌを役アイヌに任命していったため、共同体内部において役アイヌという新興勢力を台頭させ、これまでの秩序を崩壊させた。これが明治政府の法体系に基づく、さまざまなアイヌ政策の介入を容易にさせた理由と考えられる。

むすびにかえては、アイヌ社会における「政治社会の衰退期」と題した。なぜならば、明治政府という近代国家の成立により、アイヌ民族はこれまで権力に社会（集団）単位で対峙していた時代とは異なり、権力（政府）と個々人で対峙することを余儀なくされたからである。また、近代国家は国民国家の性格を持つことから、アイヌ民族は日本国民として統合され、同化が進んでいった。その結果、アイヌ社会独自の政治社会化は衰退を極めていった。

〔結論〕

この論文で明らかになったことは、アイヌ社会において首長層を中心とした政治共同体が形成され、それが発展・変容し、その後の衰退していく過程であり、その中でアイヌの抑圧された歴史が強調されてきたが、近代国家に組み込まれる前のエゾ島のアイヌ社会は一貫して、それぞれのコタンの思惑で行動するなど、自己利益を追求していた面が新たに明らかにされた。

エゾ島、特に渡島半島南端のアイヌ社会については、コシヤマイン蜂起前後に政治共同体の形成期を迎えた。その後の松前藩の経済体制の確立、つまり商場知行制の導入により渡島半島南端を中心としたエゾ島におけるアイヌ社会の政治共同体の一部は、統合化の動きを見せた。この統合化の動きは、シャクシャイン蜂起の際には全盛期を迎えるが、海保氏の言うようなアイヌ国家の形成には至らなかった。その後、松前藩の経済体制が商場知行制から場所請負制へ転換すると、松前藩の影響をよりよく受けることで、エゾ島のアイヌ社会もこれに伴って細分化され、次第に松前藩政に組み込まれていった。そして、日本が近代国家になるとアイヌの政治共同体そのものが次第に解体されていった。

このような、首長層を中心とした政治共同体の形成・変容・衰退といった変容して行く過程である。その際にエミシ社会や樺太アイヌの社会が参考になる。

和人という異民族との間における衝突が利害関係から生じた衝突から、次第にエスニシテイの違いから生じた衝突へと変化していく姿を本稿では再現できた。

しかし、近代以降の同化政策のなかでエスニシテイを堅持していくアイヌ民族の姿は、本稿では検討できなかったため、今後の研究課題とすることにした。また、近代以前のアイヌ社会における地域的差異の具体性もまた検討が不十分な点も存在しているため、この点についても、今後の課題としたい。

なお、この論文は、二年以内に出版予定である。